

一八九一年、熱河の金丹道蜂起

佐藤公彦

はじめに

- 一 社會背景
- 二 前史——太平天國期の民衆運動——
- 三 金丹道・武聖教・在理教
- 四 蜂起
- 五 反亂のあと

はじめに

一八九一（光緒十七）年は近代中國における人民大衆の反帝反封建闘争史のうえで、記憶に残されつつける記念すべき年の一つである。この年は、太平天國の敗北ののち、洋務運動の展開とともに廣汎に噴出した反キリスト教會闘争が最大の高揚を示した年であるからだ。五月から九月にかけて江蘇・浙江・安徽・江西・湖北の各府縣で哥老會に指導された大規模な仇教闘争が發生したが、⁽¹⁾その高潮を受け繼ぐかのように、十月には北部の熱河で金丹道徒と在理教徒による蜂起が開始され、天主教會もその攻撃對象とされた。この蜂起は後察するよう仇教闘争のみに限定しきれない多様な要素を内包したものはあるが、近代仇教闘争史の展開のうえからは右のような位置を與えることが可能である。⁽²⁾この蜂起が私の

興味を魅きつけるのは、同時發生的な仇教鬭争という側面ばかりでなく、蜂起が中國史上連綿と續けられてきた白蓮教（以下、明清期の民間秘密宗教とその結社一般を指すことにする）の教徒を主體とする反亂であつたにもかかわらず、あるいは、ありながらと言つたほうが正確かも知れないが、一九世紀後半の中國社會の重要課題であつたキリスト教會問題——それは歐米列強による中國侵略の目に見える具體的な發現形態であつた——に對する抵抗（反帝國主義）と清朝・モンゴル王公貴族による封建的支配抑壓に對する反抗（反封建）とを自らの課題として擔つた數少ない事例であることだ。この事件の解明は、當時の中國北部の民衆が置かれていた閉塞的社會狀況が如何なるものであつたかを闡明すると同時に、五年後に開始される大刀會や義和團による反帝國主義運動の序曲として、その理解のために重要な示唆を與えてくれるものだと思われる。いささか煩瑣で迂遠な方途であるが、出來得る限り具體的にこの蜂起の過程を描き、私の課題である義和團運動像構成への架橋的作業を試みたいと思う。

一 社會背景

熱河地方はモンゴル人を主要居住民とする地區で、清の入關以前、後金の天聰年間にこの地域のモンゴル諸部族が前後してホンタイジに投誠し、その後の清朝の軍事遠征に協力して功績を立てた結果として、清朝治下で各部族は生活遊牧區として排他的に占有し使用し得る一定面積の土地（旗地）を與えられ、首長や支配層は郡王・貝勒・貝子・鎮國公・輔國公等の封爵を授與された。各王公貴族は行政機構（府）と蒙古八旗の軍隊を統轄して一定地域を行政的に支配した。これが旗である。旗は行政上は理藩院に屬し、旗ごとに行政官位として扎薩克（王）が置かれ、郡王・貝勒・貝子・公・臺吉らの王公貴族が旗の行政業務を協理した。こうした體制下でモンゴル人の牧業中心の生活が營まれていった。

清初にはこの地域には漢人の姿は少なかったが、その後各代を通じて絶え間のない長城を越えての漢人の流入が續いていった。康熙五一年五月の上諭は、「山東の民人の口外に往來し地を墾する者多く、十萬餘に至る。伊等は皆朕の黎庶に

して、既に口外に至りて田を種し生理す、若し容留せざれば伊等をして何こに往かしむか」と述べ、人口過剩氣味の山東省邊りから數多くの貧窮民が孤身口外に出てモンゴル王公貴族やその配下のモンゴル人に寄依して山林荒地を開墾しつつ定着しようとしていた姿を見ることがができる。當時は開墾地は肥沃な所が多く、モンゴル人に納める負擔も少なく、内地で生計を立てるより易しかったという。そのため口外移住の禁令をおかす移住者が次第に増加し「康熙年間、喀喇沁扎薩克などの地方は寛廣にして、民人を招募する毎に、春には口を出て地を種させ、冬には則ち遣回せしむ（これを「雁行人」という——筆者注）も、ここにおいて蒙古は得租の利を貪り、外來の民人を容留す。今まで多く數萬に至る」（乾隆十三年九月）と述べられ、モンゴル人は客民に對して「地畝を賤價にて」「出典し墾」させ、客民はモンゴルの佃戸となつて定着し、始めて家室を立て子供を育てるようになっていった。乾隆初期に直隸・山東の貧民の移住の波が起き、この頃、客民たちは家屋を構え村落を形成するようになったといわれる。

この乾隆期のモンゴル・漢人雜處の様相を乾隆刑科題本中の租田關係史料から拾いあげて見てみることにしよう（表1）。

これらの事例からだけでも山東——朝陽縣の漢人はその七、八割が山東人、残りが山西・直隸人という——邊りから口外へ移住して行つた人々が、モンゴル人「巨室」あるいはその「奴隸之家」（包衣など）や先住漢人（開墾請負人）下の佃戸として組み込まれて行つた構造を見て取ることができる。やがて蒙旗は收租局を設けて小作料を徴收するようになった。だが、漢人の流入と定着農耕のひろがりにはモンゴル人の遊牧生活基盤の狹隘化を生み、下層モンゴル人の困窮化をもたらした。⁽⁸⁾ 皇帝の避暑山莊が置かれた承德府下では康熙年間に皇帝の狩獵場として、東西三百餘華里、南北二百餘華里、周圍一千三百餘華里に及ぶ廣大な圍場がモンゴル王公貴族から獻上されていたから、この傾向はより一層強かつたに違いない。

〈表1〉

①熱河八溝

正黄旗の吉蘭太管領下の劉君賜の壯丁で獅子溝に住んでいる李士斌は、かれの祖父が蒙古の荒地を請け負って九頃七十畝を開墾していたのを相續し、毎年租糧四十八石五斗、租銀三十二兩を交めていた。かれと母舅が共同で三十數畝を耕作するほかは、張得武という人物たちに耕作（又小作）させていた。乾隆二十五年に蒙古と清算してみたところ、租糧一百八十石、租銀百十一兩を欠していたので土地を返還せざるを得なくなった。

②熱河八溝

熱河八溝の榆樹林に住む于起山は、喀喇沁扎薩公七齊克旗畢什里圖章吉箭上の蒙古喇嘛である蘇吉圖の家の土地一頃九十畝を租種し、毎年租銀二十兩と議定していたが、乾隆三十四年の租を遅らせていたので、蘇吉圖が取りたてに赴いたところ、口内に煙草賣りに行った兄が戻るまで待つてくれといったが、争いになり、蘇吉圖を傷害致死せしめた。

③承德府朝陽縣

承德府朝陽縣櫻桃溝に寄住していた山東榮城縣人の丁文學(2)は、乾隆五十七年春に同村の劉成祥の土地を小作するのに、退地のときには返還する約束で二十五千大錢の押租を支拂った。二年ほど耕作したが利益が上らないので退佃した。その際、押租の錢の返還をめぐって争い、傷害致死事件をひきおこした。

④熱河八溝

(乾隆三四年)

熱河八溝の湖池溝に住住していた山東寧海州人の丁世榮は、蒙古の土地を租種していたが、叔の張二舉がかれから四十六畝の土地を又小作した。ところが張二舉は歷年小作料を拖欠し、六石七斗にのぼったが全然拂おうとしなかった。

⑤熱河八溝

熱河八溝の二口營子に住んでいた山東歷城縣人の許萬良(3)は、乾隆三十九年に蒙古の家の一頃二十畝の土地を請け負った。知人の徐大年が耕す土地がなかったのでその土地の半分を耕作させることにしたが、四十年五月、徐大年といさかいを起して傷害致死せしめた。

⑥ 承德府建昌縣

寧遠州に住む鑲黃旗胡文吉佐領下人の胡存の家は、康熙十八年に蒙古の嘎拉甲の祖上から荒地一處を租寫し、それを朱謙の家に轉給して墾種させていた。毎年租銀三十二兩を交めたが、拖欠することはなかった。乾隆五十五年朱謙が不作のために小作料を支拂えなくなると、地主の嘎拉甲は地畝を撤し羅城喇嘛に交して承種させた。五十六年二月に仲介が出て、三月中に朱謙が交租すれば種地を許すことになった。ところが胡存らは羅城喇嘛がすでに該地に麥を植えているのを見て、税員衙門に訴えた。審議は未決で、胡存らも租を交めなかったが、六月に羅城喇嘛は他の喇嘛をつれて來て麥をひき抜いた。これを阻んだ胡存らと争い傷害致死事件をおこした。

〈注〉

中國第一歴史檔案館等編『清代地租剝削形態』中華書局一九八二、①（二九一—二九三頁）、②（三一一—三三二頁）、③（四八一—四八二頁）、④（六五四—六五五頁）、⑤（六七八—六七九頁）、⑥（七〇九—七一〇頁）

二 前史——太平天國期の民衆運動——

こうしてこの地區における蒙漢雜處の局面が形成されたが、それに伴って乾隆四十三年に熱河廳を承德府に昇格させるとともに、八溝廳なども一州五縣（平泉州、建昌、朝陽、灤平、豐寧、赤峰）に改められた。この社會狀況に大きな衝擊が加えられ、社會的な流動狀況が生じたのは太平天國期であった。清朝政府は太平天國鎮壓のために生じた財政的困難を乗切するために、内蒙古地區において蒙地開放政策を採用し、賦税を徴收し、所謂「押荒」銀兩を得ようと圖った。蒙古八旗官地や廣大な荒地を漢人に開放して「富商を招集して開墾させて課に升せ」⁽⁹⁾「佃を招きて租を納め」させて「毎畝五升を科に升せ」⁽¹⁰⁾ようにしたのである。一八六三年には熱河圍場の四面の荒地八千頃さえも「佃を招きて開墾させ」、押荒銀兩を取る對象とされた⁽¹¹⁾。加えて、モンゴル王公貴族からの「捐輸」と蒙古八旗・王公の軍事動員——その典型を僧格林沁^{サンゲリンチン}に見ることができよう——がこの地域における社會的緊張を生んだ。これらは結果的にはいづれもモンゴル王公貴族支配下の大衆からの收奪強化によって補填されねばならない性質のものであったから、抗租闘争をはじめとする民衆の抵抗運動を

〈表2〉

一八五一 一八五二	内蒙古 哲里木盟 科爾沁左翼後旗	佃戶吳保泰、王柏齡を指導者とし、モンゴル族・漢族農民四、五千人を動員して減租を要求、數百名規模の抗租闘争に發展、武力で鎮壓さる。
一八五三	卓索圖盟 土默特右旗八枝箭	モンゴル族遊牧民、太平軍鎮壓のための兵差が過重であるとして抗議。
一八五四 一八五五	哲里木盟 科爾沁左翼後旗	漢族の霍義・孟玉齡を指導者とする抗租闘争。モンゴル族農民参加、蒙・漢佃民五、六百名。
一八五七	卓索圖盟 土默特右旗八枝旗	王府による土地霸占到に對する奪回闘争。抽丁充兵、壯丁調査に抵抗。
一八五七	卓索圖盟 喀喇沁右翼中旗 大開爾溝地方	鑛山勞働者・劉福泰を指導者とする一、二千人規模の反官府・「衙署焚毀」闘争。
一八五八	伊克昭盟 烏審旗	「獨貴龍」蜂起。蒙古牧民、蒙古王府に對し「官差」、「勞役」に反對、「雜稅」輕減を要求。
一八六〇 一八六五	卓索圖盟 東土默特旗	綽金汰、那木薩賚を指導者とする「老人(頭)會」運動。差項過重、横徵苛斂に抵抗。

劉毅生「太平天國期蒙古地區各族人民の反清起義」『歴史教學』一九八一・六 『清朝實錄』、咸豐五年五月己卯條、同治元年十二月辛卯、二年六月甲辰、十一月丁巳、三年四月己亥、七月丁卯、四年二月壬辰の各條、『朝陽縣志』卷三五藝文、による。

呼び起したのである。(表2)はそれらの代表的事例である。

これらの動きを受けて、朝陽附近でも民衆鬪争の動きが活発化していった。道光末年の頃から平泉・朝陽・建昌交界地帯の金廠溝梁などで金鑛を私掘していた鑛山労働者たちが、しばしば騒ぎを起したり、騎馬で周邊に出て追剥ぎや強奪を行ったりして「金匪」と呼ばれていた。⁽¹²⁾その首領は朝陽南大店で店舗を經營していた李鳳奎と、もと義州捕廳外委の高瑞であったが、咸豐九年二月には、李白玉ら二百餘の金匪が朝陽城内に盤踞して騒ぎを起し、一千餘兩を強請り取って引き上げた。同じ頃、豊寧縣でも反獄戕官事件が発生した。冬には、奉天省の巨賊王洛七(錦州南凌子人)・閻洛六の集團が動き回ったが、この王洛七集團内には、卓索圖盟喀喇沁右翼旗人、自供に據ると敖罕(漢)貝子旗營下の蒙古人で「販馬」を生業としていた白凌阿も加わっていた。⁽¹³⁾奉天副都統恩荷は王・閻集團を追尾して金廠溝梁に追い詰め、逃走せんとした閻洛六らを捕獲している。この時白凌阿らは逃亡し、朝陽東の達爾罕王旗の彌勒僧格(白凌阿の甥)や趙保承(二喇嘛)と結んだらしい。翌咸豐十年秋、「奉天賊」王達、「東荒(朝陽東部)蒙古人」白凌阿、「朝陽賊」劉珠が五十人程の集團を率いて朝陽縣街に迫り、李白玉の例にならって銀數百兩を強請り取って立ち去った。また錦州石山站で科爾沁旗の餉車・金條十三塊・寶銀五個を略奪し(十月)、更にこの年に義州城を陥した。盛京軍の壓迫によってこの「抗糧」蜂起軍は義州城南門から脱出したが、⁽¹⁴⁾閉もなく王達は捕えられて處刑された。劉珠は李鳳奎の下に身を隠し、白凌阿もまた李の下に加わったらしい。折しも第二次アヘン戦争によって天津北京地區は英佛連合軍に蹂躪され、咸豐帝は熱河承德の避暑山莊に逃げてきていた。この頃、永平府昌黎縣の廩生・才寶善が永平獄を破って逃亡してやはり李鳳奎の處に匿われていたが、彼はこの機に「大逆を舉行して自ら立ちて王と爲る」⁽¹⁵⁾ようと李鳳奎を唆した。咸豐十一年二月二日、李鳳奎・劉珠(劉猪)は金匪多數を率いて朝陽縣城に迫った。二月初四日、劉珠らは六、七百人を糾集して縣署に殺入し、監獄を破って囚人三百餘を放出、縣署・捕廳・監獄署・理藩員司署を一炬に付し、稅員衙門の庫銀を奪い、大商店數家を焼いた。⁽¹⁶⁾彼らは縣街や付近に據って飼葉食糧を集め、人馬を招集して軍備を整え、李鳳奎は自ら「皇帝」と稱して身に黃袍を披り、頭に

は冕旒を戴き、才寶善を軍師、劉珠を領兵元帥に封じ、李鳳奎の母は皇太后として五花冠を戴いたという。これらは伶人げいじんの演劇用衣冠を奪って用いたものだ。李鳳奎・才寶善らは勢力の擴大と軍の充實を目的に、一隊を北方の赤峰に派遣して衙署を焚焼し、獄を破って囚人を放ち掠奪を行った。⁽¹⁷⁾熱河の咸豐帝は捻軍鎮壓戦に活躍して山東から歸陣していた陝西・奉天・黒龍江軍を投入して鎮壓に向わせた。李鳳奎・劉珠らは數百の部隊を率いて義州へ向っていたが、清軍が西南二方から朝陽に接近すると蜂起集團は潰走した。朝陽から南へ逃走した中核部隊も付近の社長らが率いる鄉村自衛組織の奇襲を受け、奉天省界へ逃げ込んだ。このとき、李鳳奎と劉珠との間の不信感が亢じて、李が劉を殺害するといふ分裂騒ぎがおき、蜂起集團の力量は半減し、追い詰められた集團はやがて瓦解した。⁽¹⁸⁾李鳳奎も逃れて家族を探して流浪し、乞食をしているところを見破られて郷長・社長らに捕えられ、朝陽縣に送られ、頭目郭落萃とともに市中で梟首示衆に處された。この騒亂に懲りた當局は、富戸の贖金を基に、團練の人和局・義和練局を設置した。

咸豐十一年五月、吉林邊界に逃走した才寶善らは三、四千人を集めて昌圖廳・科爾沁蒙古地方を騷擾した。年末には、白凌阿・才寶善は義州境内に入り、城北の高臺子に盤踞、ついで同治元年五月には、閭陽驛で焚搶を圖って官軍の追撃を受けている。⁽¹⁹⁾翌同治二年十月には、才寶善・白凌阿は再び昌圖廳に姿を現わし、かつて咸豐十年に同じく李鳳奎の配下の仲間であった滾地雷王五（昌圖の盜首）や該地方の頭目齊秀らと結んで活動した。⁽²⁰⁾民國『義縣志』中卷は、同治二年に「流賊」柴寶善（才寶善）が叛し、地方を擾亂した、と誌しているから、彼らは相當廣域に亘って活動を繰り返していたのであろう。同治四年十一月には王鍾元・趙大刀・馬傻子等に率いられた四、五千の吉林賊が奉天省廣寧を犯し義州に進攻した。この王鍾元は朝陽縣北哈爾腦東溝人で「賭棍」、さきに李鳳奎集團内で頭目であったが、李鳳奎死後に吉林省大溝に逃亡し、群賊を集めて捲土重來を圖っていたのである。彼らは紅・黄・藍三旗をたてて義州に進攻したのち、錦州周邊を剽掠、十一月十九日には朝陽を攻撃、やがて城内に侵入し、激戦ののち制壓した。⁽²¹⁾十二月六日、鎮壓に出動した清軍を見た蜂起軍は人質を取って逃走したが、のちに朝陽坡で群賊と集合したところを撃滅され、殘部は遠遁した。翌年二月、

この殘餘部隊二百餘が動き回ったが、やがて北へ去った。同治八年、生きのびていた馬傻子が義州で叛亂した。その後、光緒十一年に「巨盜劉姓」が逮捕處刑されるに及んでこの一連の騷亂は終焉した。⁽²²⁾だが、咸豐同治年間に組織された義和練局・人和局なども經費難から光緒四年には全廢され、朝陽縣下の鄉村自衛組織は次第に弱體化していった。

この咸豐同治期の熱河朝陽附近を中心とする蜂起と騷亂は、咸豐十一年を頂點とする全國的抗糧鬪争の一環をなす性質をもっており、これらの廣大な鬪争を背景として鬪われた李鳳奎蜂起は、蒙古・漢族民衆を糾合して地方權力樹立の方向を打ち出すという突出した形態を示すに至った。更に、同治七年に逮捕處刑された白凌阿の活動に典型的に示される様に、廣大な地理的環境を利用して各地で執拗に長期間に亘って持續されたことを特徴とする。太平天國・捻軍に對する鎮壓軍事力として東三省・蒙古軍が動員されたことを考えれば、これらの鬪争は側面から太平天國・捻軍を支援するという客觀的役割を果す位置にあつたのだが、その力量は零細に過ぎたといわねばならないであらう。にもかかわらず、その活動地域の重複もさることながら、後述するように、幾つかの行動様式からみて李鳳奎蜂起は金丹道蜂起に大きな影響を與えていることが窺われるのである。

光緒十年には、熱河建昌縣から赤峰・豐寧・圍場・多倫・克什克騰旗・巴林旗に亘つて數集團による蜂起が起き、熱河・宣化・古北口などから練軍が出勤し鎮壓するという事件が発生している。⁽²³⁾楊步濤を頭目とした集團は、建昌縣で騷擾を起したのちに圍場の邊境に盤踞した。多倫付近では宋教思らが騷ぎを起していたが、この多倫附近の「匪徒は即ち前に建昌にいた匪首楊步濤等の在内に有り、楊步濤は已に宋教思と合股せるに似たり」といわれる。⁽²⁴⁾もう一つの集團は王端仁を首領とした蜂起集團で、四月に克什克騰旗の黑沙灘・魚泡子で騷擾を起したのち、沿途で衆を加え、二千餘人になつた部隊は「四色の號旗」をたて、王端仁を「平王唐主」に、楊長青を總頭、楊九如を棚頭として、宣化府・巴林旗・赤峰縣・豐寧縣の域内を搶劫した。この王端仁(王佃仁)⁽⁴⁰⁾は、山東曹州府荷澤縣人で、咸豐同治年間には山東で太平軍、捻軍に對抗した勇目に充當して頂翎をもらつたこともあつたが、郷勇解散後には生活に困窮して、その年に出口してから二

十數年になるが、克什克騰旗の黑沙灘・魚泡子で魚をとつて生計を立てていた。ところが、「蒙古が魚を捕えさせず、また多人を殺斃したため」、楊長青らと圖つて黑沙灘に四、五百人を集め、「遂に復仇に藉りて名と爲し、頓に變亂を生じさせた」⁽²⁶⁾のである。李鴻章は「口外各屬の客民は多くは直隸山東の無業の徒に係る、陸續と前往し、或いは荒地を開墾し、或いは小質して生を營む」⁽²⁷⁾と述べているが、楊長青や楊九如も王端仁と同様にこのような境遇に置かれていたのである。楊步瀆・宋敬思・王端仁らはその後いづれも奉天域内へ逃亡したが、光緒十七年四月、熱河圍場附近の朝陽灣子であつての黨羽百餘人が再び騷擾をおこした。この騷ぎを鎮壓した官軍は、八面城（遼寧吉林交界）から圍場に戻つて潛伏していた王端仁を七年ぶりに捕えたのである。

このような社會狀況は、金丹道蜂起にも同じように見られる。朝陽一帯の土地山林の多くは郡王・貝勒・貝子などモンゴル王公貴族の封土⁽²⁸⁾旗地で、流入漢人の多くは定着しようとする、これらモンゴル貴族や内モンゴル東部の一千にのぼる喇嘛寺院の佃戸となつて土地を耕さざるを得なかつたが、モンゴル貴族はしばしば「漢民の租課を勒増して」⁽²⁹⁾人々の生活財産を奪い、なかでも喇嘛寺院の所有地は極めて多く、その地租は高額で、蒙漢佃戸の怨嗟の對象となつていた。のちに金丹道が根をおろした朝陽縣曲連溝などの村々は黒大山の近くに位置していたが、「若し漢人が山に入りて樵採し、或いは細小の樹木を砍伐して巡山の山韃子に獲住られたら、十に一生なく、百般拷掠し、用いる所の刑は尤も人の聽聞を駭かす」⁽³⁰⁾と記されている。事實、蜂起指導者の楊悅春は、自分は「向に救漢貝子の旗地を種していたが、該貝子（達木林達爾達克・筆者注）が昭烏達十一旗の盟長になつてからは、租課がしばしば増し、またその子の色二爺と喇嘛四爺をはなち、勢を籍にきて横行し、訛索奸淫、拷打殺害するなど、あらんかぎりの悪をやつた。その累を受けた者は敢て官にうつたえて理をあきらかにしようとはせず、恨みを懷くこと甚だ深く、報復して忿を泄したいと思つていたのだ」⁽³¹⁾、とその反逆の動機を述べており、頭目の一人の齊保山（齊洛道）も、去年（光緒十六年）の十一月と今年五月に自分の「胞弟と胞姪が黒山で私かに柴草を砍つたところ、前後して蒙古旗に擧獲られ、懲辦されて身死んだ。（だから）心に忿怨を懷い」⁽³²⁾て蜂起

供述している。

に加わったのだ、と供述している。頭目潘岳淋も「山木を砍伐するに因りて素より蒙古と嫌怨を積有していた」⁽³³⁾と言っている。また「漢人の柴草等の物を擔いで貝子府街に到りて出售する者は往々その奴僕に苛罰責打され、日積月累して蒙漢の悪感は日に深」⁽³⁴⁾くなっていたといわれるように、モンゴル貴族の支配が極めて露骨な暴力的なものであり、ようやく小屋がけたような家ともつかぬ處に住む貧窮客民の漢人たちはその脅威に晒れ、個人的屈從を強いられて彼らの思いは鬱屈していた。彼らは自分たちを保護してくれる地域社會秩序から放擲されて、異境での孤立を味わっていたし、民事的色彩を帯びた對立を一旦公平に緩和調停し得る唯一の存在であった公權力は、理藩院管轄下の蒙古理事官と直隸省下の六州縣當局との對立によって機能せず、加えて「各任の熱河都統は多く賣官を以て生活と爲し、是において、(錢で官を買った)各縣官は貪婪なること尤も甚し」⁽³⁵⁾く、「承德府知府啓紹の如きは誕妄浮夸にして、貪婪夙に著るしく、所屬の州縣より横索した贓款は、盈千累萬」⁽³⁶⁾と言われる程に腐朽を深めていた。それ故かれら客民漢人は「敢て官にうったえて理をあきらかにしようとはしなかつた」し、逆に「貪官を殺すを名とした」のである。こうなると、自らの利害を守るものは自ら、つまり私的なものにならざるを得なくなる。金丹道や武聖教、在理教といった民間宗教結社は、それぞれ説く宗教内容に性格や程度の違いはあれ、このように分斷され孤立し無力な状態に置かれていた客民漢人たちが相互に結びつける統合的役割を果していったのである。宗教結社を人々が受容していった素地はこうした彼らの社會的境遇であつたのだと言ひ換えてもよからう。では、この金丹道、武聖教、在理教とは一體どのような宗教組織であつたのだろうか。

三 金丹道・武聖教・在理教

蜂起の中心組織は大別すると、(1)金丹道、(2)武聖教、(3)在理教、(4)及びその他、から成る複合體であることが知られるが、その中核的存在である金丹道について、蜂起の首謀者である熱河建昌縣楊家灣子村人の楊悅春(51歲)は次のように

従前に江南の老道（士）の郭姓なるものがかれ（楊悅春）のところに至って布施を求めたことがあったが、（その時に）『夢首經』など六種（の經本）を傳授していった。かれ（楊悅春）は、齊瀨、王幅、楊連元、郭洛元などに轉傳し、名を聖道門に取り、また金丹教と名づけた。齊瀨らはまた輾轉と（朝陽、建昌、平泉州などの地の）多人に傳授した。此教は人に學好（しんじょう）を勧めるだけのもので、けつして邪術は無く、是を以て信從する者が衆くなった。かれはまた兼ねて醫藥を施し、人は皆な楊四老師と稱している（37）（カッコは筆者注）

『朝陽縣志』卷三十三は、すでに光緒初年に縣の東南方の炒米甸子、碾盤溝などの村に金丹道の教堂が設立され、一道士が師となり、夜聚り晝に散じ、男女均しく入教でき、「練成すれば槍刀も傷つく能わず、駕雲上升などの術を能くす」といつていたが、その後、該地の有力有識者たちに逐われ、遂に潛かに逃げて朝陽縣北方・建昌縣・敖漢地方に至って、楊家灣子村の醫生楊彥（悅）春の家中に教堂を設立した。楊家は全家をあげて入信した、と述べている。朝陽東南から楊家灣子村へ移動して金丹道を傳えたこの人物が、楊悅春供述のいう郭道士であると考えてよいだろう。だが、教徒の李洛道（李教明）の「さきに五聖道工夫、また學好と名づく、を用いてすでに三十年になる」（38）との供述から判斷すると、それ以前からこの地域で白蓮教の布教活動が行われていたこと、を窺い知ることができ、郭道士の活動はそうした動きの一部をなすもので、光緒初期に楊悅春を介して定着をみたのだと考えられる。

その活動の具體的様相は、「一人に喫齋行善を勧め、故に士人もまた學好者と稱しており、煙・酒を食まざるを例とし、名は教を學ぶを以て人を誘うも、實は燒香を以て衆を聚めている」（39）、「善事を修むと伴りて……煽惑す」（40）、「自ら善類と稱す」と記されており、金丹道は「法術を學び、大清に抗して眞主を興す」反清復明の祕密結社であると言われながらも、施療や喫齋行善、禁酒禁煙を内容とする勸善修養團體の如き行動性格を濃くしている。恐らく現實にもまたそうであったに違いない。楊家灣子村の教堂を中心に、附近各村に教堂が設立され、統轄する傳教首を老師、楊悅春を總老師と呼び、附近の教徒は一月に一度、關東や山東の教徒は一年に一度聚ったという。「垢を臧し汚を納れ、久しく叵測を懐く」とあ

るから、食い詰めたアウトローたちも加わったらしい。⁽⁴³⁾

金丹道という教名は、遠くは『抱朴子』や魏伯陽の説く金丹を作って長生きしようとする道教の思想・技術に淵源由來し、十二世紀ごろから廣範に説かれた内丹——心中の一粒金丹（佛教でいう人間の佛性・淨菩提心などにあたる）を覺知して精修すれば、やがて眞體を完成して道と合一する（悟りの境地に達する）⁽⁴⁴⁾の影響を受けたものであろうが、直接的には道光年間以降に南部各省にひろがった青蓮教（別稱||金丹道・金丹大道）に繋るものと考えられる。⁽⁴⁵⁾しかし熱河の金丹道が青蓮教の北方への流傳系譜上にあるとはいへ、明確な組織関係はなく、武聖教との習合性（後述）にみられるように性格的にも完全に一致したものではない。

この金丹道と組織成員のうえからも重複したがたをみせているのが、武聖教とよばれる組織である。この派についてはいくつかの材料もあって比較的檢索し易い。楊悅春は、もう一人の指導者である「李國珍は、（金丹教||聖道門のほか）兼ねて武聖門を習い、各股の人馬の中にはまた均しく武聖門中の人があるが、⁽⁴⁶⁾屢は官兵に敗られて各自逃散した。起事の初めに『符咒は能く槍刀を避く』と信言したのは、實は人を哄^{けまよひ}る説でありました」と供述しているから、この證言に據ると、金丹道と武聖門とは違ったものと考えられていたことが知れる。「掃北武聖人」李國珍は赤峰攻撃の折に「二十餘營を立てて八卦方向に按じて名目を混立⁽⁴⁷⁾」したし、十八年に、謝添朋・楊泳剛・侯得山らが捕えられた際には「紙圖人三個、八卦圖二個、『奇門遁甲』呪語、邪術卦本などの書⁽⁴⁸⁾」が押収された。また、「坎號を号した樹四十餘件⁽⁴⁹⁾」も見つかっている。沈國泳は、同治年間に「外來の道士曹義路から武聖教金鐘罩邪術を學び成り、符咒を傳習して、衆生・天命・正恩・隱恩・寶恩・頂航・十闕・十誦・五老の九等の名目を創立し、錢を斂めて衆を惑わし、入教して術を習えば能く刀兵の劫數を避け、槍砲も身を傷つること能わず、と捏稱した⁽⁵⁰⁾」し、武聖教の各地の基層教徒小組織を「盤」とよび、「武聖教の天・地・雲三種の盤圖」があつて「三盤を以て據となした⁽⁵¹⁾」という。

これらの諸特徴から判斷すると、武聖教||金鐘罩には八卦教武派の性格が色濃く見られ、それに青蓮教||金丹道（未後

一著教（一貫道）の影響が加わっていることが知れる。⁽⁵²⁾ だが、武聖教と金丹道との関係はそれ程分明ではない。両者は成員のうえからも重複しているし、「金丹道五聖門は假りて人に學好（しんじん）を勸むるを以て名とす」、「五聖道工夫、また學好（しんじん）と名づく、を用いて」と云われるように、⁽⁵³⁾ 五聖道（ウ）武聖道（ウ）であり、金丹教（一聖道門）も武聖教（一聖道門、五聖門）も學好（しんじん）とい、聖道門と五聖道はどこかで通底しているのであろう。

従つて、金丹道と武聖教とは極めて密着した不可分の関係、相互に排斥しあうことのない習合性を帯びており、兩者の關係は八卦教における「文」派——「武」派の關係に類似したものと考えられる。金丹道・武聖教のもつ勸善喫齋、禁酒禁煙（ア）、燒香聚衆と符呪・工夫（ア）身體鍛練に就いていえば、前者は在理教の活動と繋る要素でもある。このことが、のちに金丹道と在理教との結合を齎す要因でもあつたらう。

在裏教（在理教）は、當時天津を中心に直隸省一帯に廣まりつつあつた宗教的修養團體で、清末の「アヘン吸飲の盛行」ともに姿を現わしてきていた。アヘン中毒によつて身體は病み衰え、經濟的に困窮した家庭は崩壞の危機に瀕していったが、この深刻な社會問題を背景に、宗教的な力をかりて「アヘンと酒を嚴禁」させ、中毒患者を治療することを主な活動としたため、この結社は急速に華北東北地方に廣まっていた。

その創始については諸説があつて確實なところは未だ判明しない。一説では、⁽⁵⁴⁾ 在理教は玄門全眞道教の一支流で、明末清初に、山東萊州府即墨縣の楊萊如（原名は澄澄）——萬曆壬寅生れの進士——が、明朝滅亡後に兩朝に仕えるのを拒否して、嶗山の程楊旺（吳陽春という説もある）に従つて道を學んで創唱したもので、その道とは、老聃から尹喜が受け、「道德經」のことか？、元代の邱處機（長春子）の全眞道龍門派に繋がり、程楊旺に至つたものだと言われている。かれは康熙三六六年に没したが、弟子の代の嘉慶年間に天津に在理教公所を設けるようになったという。この説を更に増幅させて、明の遺老が排滿興漢を目的に組織した祕密結社とするものもあるが、その信用度は疑わしい。

別説は、⁽⁵⁵⁾ 在裏教の創始者は明末とも嘉慶・道光年間ともいわれるが、天津滄縣永豐村の尹靈（尹某）という人物で、か

これは戒酒、戒煙を業に説き病人救済に努めた、あるいは一道人に會つて宗教的回心を経て符水で病氣直しをやつて多くの門徒を得た人物で、その死後に廣まつたものだといひ、在裏というの是一圈を蓋畫して教えとし、教徒はみなその内にいると謂うからだ、といわれる。在裏教の本山は永豊縣の志武堂だといわれること、またアヘン流行の時期を考え合わせると、嘉慶道光期の尹靈とするこの説にも相當の根據があるのであらう。

その宗教は、「佛教の法を奉じ、儒教の禮を習ひ、道教の行を修む」「三教を渾然融合した一種の總合宗教」⁽⁵⁶⁾で、譚嗣同によると、「孔子教、佛教、イエス教、イスラム教の上つつらをとつてこしらえたもの」といふ。輪廻思想や因果應報、拔苦興樂を庶民にわかるように説き、正身、修身、克己、復禮を本として禁酒禁煙を習うものだといわれる。入教者は紹介者に伴われて公所にある祭壇の前で跪坐し、あるいは「五體投地して以て老師父を拜」し、誓約ののち入教を許されるが、その時信仰心得を訓示され、教徒の相互友愛、酒煙の絶禁を誓わされる。更に父母妻子にも絶対に祕密にすべき「密咒」五字が傳授される。この五字は「觀世音菩薩」⁽⁵⁸⁾なのだが、別説では「一心保大明」(或いは「一心滅滿清」、「努力滅滿清」)であつたものを變えたのだといふ。譚嗣同は『唵嘛呢叭咪吽』というラマ教徒の唱える觀音菩薩の眞言、六字大明呪であつたと述べている。⁽⁵⁹⁾在裏教にはラマ教の影響も加わつていたらしいが、反滿清祕密結社説は清末革命派によつて喧傳されたもので信用できない。この場合に限らず、清末の革命派が政治目的のために當時の祕密結社の類をほとんど反滿姿勢を持つ同盟的存在なだと喧傳し工作しようとしたため、巷間にそれが流布し、こうした民衆組織の實相をかえつて見えにくくしているという事情があるから注意が必要であらう。

在裏教のアヘン中毒治療は、主に信仰戒律による修養克己を中心としたが、また「茶膏」という種々の藥草から製造した藥丸を服用させて禁斷症状を抑制させつつ、患者を施設に收容してアヘン地獄から抜け出させた。この治療活動は實際に效き目を表わし、多數の人々をアヘン中毒から救済したため、やがて有益な社會事業として人々に認知されるようになる、中毒治療ばかりでなく克己修養を目的とした人々も加入し、天津では「民間でその教に従う者は約十の六七、みな

身家恒業をもつが、大率^{おほそ}は手藝^{てぎ}力役^{りきやく}の人が較^{おほ}多く、農商^{のうしやう}がこれに次ぎ、讀書^{とくしやう}の人もまたまある⁽⁶⁰⁾」(光緒九年)と言われ、中下層民衆の間に廣まっていた。在裏教の教勢は次第に熱河地方にも及び、該地で「酒煙を食まず」「喫齋行善」を標榜していた金丹道と布教局面で接觸し、相互にその存在と活動を認知し合う關係にあつたと考えられる。

これらの清代の白蓮教結社や民間宗教結社は概して「反清復明」の祕密結社であるとして一般的に規定されるのだが、どうもそれだけで済ますわけにはいかないのではないかと思われる。

清代の民間宗教結社が祕密結社の形式をとるのは、「公生活の不自由」(G・ジンメル)、すなわち公權力によって「邪」として道徳的に貶められたうえその活動を禁壓され(結社の自由の禁壓)たことに由るのであり、結社の性格を規定しようとして、私たちが宗教結社の宗教思想や組織を分析していつてみても、政治的結社としてその性格が明瞭に浮かび上ってくることは少ないのである。見えてくるものは、民間宗教結社に吸収されてくる庶民たちの直接的な動機が、これらの社會生活、個人の人生の不幸に根差しているという事實である。それらの動機に共通するものは、(存在の不安定からの回復)という人々の熱い希求である。具體的には、病氣や貧苦、流浪、争い、そしてそれらに伴う生活苦をはじめとする種々の苦惱、不安、孤獨、差別、疎外をかみしめている人々が、そこからの(救濟)と自らの社會生活と精神の安定へ、即ち苦難の意味の明示を通して社會や他の人々と結ばれてあるという意識、人格的結合とそれによる歸屬意識の回復、精神的慰安と存在の安定性の回復、へと人々を魂の深奥で衝き動かしているからなのだと思う。従つてその宗教團體の成立の社會的基盤にはすでに累積された「不幸」が横たわっているのだといわねばならず、その宗教團體は「不幸の辨神論」をさえはぐくんでいるのだとさえ言い得る。言い換えれば、現世俗世を不正とし、拒否しようとする意識が育つ土壤が背後にあるのだと言えよう。にもかかわらず、この下層の人々の「苦の共同體」は福祉國家の外被をまとつた専制國家からは危険な許容し難い存在として禁壓され續けてきたのである。このとき、結社がその成員とともに抱え込んだ現世俗世に對する欲求不満、嘆き、怒り、怨み、憎しみなどの否定的感情は、斷念的にはその代償として來世「あの世」へのかぎり

ない憧憬の投射を生むし、また一方では、不正な俗世の守護神としてその社會秩序の維持を第一の任務として禁壓へ乗り出す権力と對峙しつつ、それを峻拒し、やがてこの俗悪と不正に満ちた俗世界そのものを見限り、別な世界―「あの世」や別な時間でない、いま・ここにおいてその根本的轉換を憧憬し期待するようになり易い。自然災害や政治的變動（刀兵亂）の受身的存在として自己存在の矮小性を否應なく納得甘受せざるを得なかつた中國民衆は、不幸への對症的療法としての術―「魔術」や終末論的「劫」思想を生み出したが、このような宗教結社の集團感情は、清朝のイデオロギー支配が硬質で、その政治が改良主義的柔構造を持たないが故に、宗教が社會批判・政治批判へともつとも接近し易いものであることもあつて、暴力的に噴出せざるを得なくなる。こうしたときの宗教結社成員の現世否定的感情を集團的統一的に、政治的に表現し得るスローガンが「反清」なのであり、否定の否定として提出されるのが「復明」スローガン、「眞主」待望思想なのである。白蓮教結社とその成員には當初から明確な政治綱領的意識がある譯ではない。「反清復明」は、結社成員や民衆の個別的には濃淡や偏差のある現世否定的感情を收斂させつつ一般性をもつた集團的意識へと昇華させ得る最も普遍的な、それゆえ漠然とした最大公約數的政治意識の表現形態であるのだと思う。それゆえ、危急の際に集團的に表出される人々の共同意識として深層から噴出することにもなるのだと思われる。これが清代の宗教的民衆運動において「反清復明」が表面化してくる回路であると私は考える。このことは白蓮教結社のみならず、天地會系秘密結社についてもある程度妥當するのではなからうか。清代の秘密結社の反清朝という政治的性格は、権力による禁壓に對する抵抗の累積の結果として、その歴史的拮抗が秘密結社に自然生のうちに極印したものと考へた方がよいように思えてならない。

四 蜂 起

金丹道や武聖教に加わつたり、接觸した人々は、相互の交流を通じて、彼らが蒙っている迫害や苦難が耐え忍ばねばならない偶然的な個人の運命ではなく、お互いに共通した社會的なものであることに氣付き、それ故にまた一層かれらの胸

中の憎しみを激昂させたに違いない。苦しみ、悲しみ、憎しみの共有は、やがて金丹道・武聖教組織とモンゴル王公府との間の敵對意識の亢進となつていった。金丹道・武聖教側は、「起事謀反を商議し、陸續と洋礮器械を購ひ備え、旗幟を置造した」⁽⁶¹⁾、「楊悅春らが未だ起事しない以先に、曾て該犯沈國泳（奉天省新民廳三臺子人——筆者）と舉事を通謀した」といわれるから、武力を以てしても抵抗報復しようという姿勢を見せていたらしい。緊張を深めつつあつたこの敵對關係はやがて沸騰點を迎える。

楊悅春は、蜂起を決意するに至つた直接の契機を、「十月初間（はしめ）に（敷漢）貝子がモンゴル兵一千餘人を調派し、辭は打獵に托しているが、實は金丹道教を剿殺せんと欲しているのだ、と聞いたので、即ちに夥黨數千人を聚め、モンゴル兵が未だ齊わぬのに乗じて、先に貝子府を攻め破つた」⁽⁶³⁾と述べている。徐潤は、金丹道側が蜂起以前に貝子府前の店舗の布疋と紙類を全て買い盡し、布を頭巾にし、紙を護心にして、紙の性は綿軟で彈丸も透し難いとしていたこと、そして世間では「學好者は將來貝子府を破るだろうと謠傳」したため、敷漢貝子はモンゴル兵を集めて不慮に備えようとしたが、これが金丹道側の先のような疑惑を生んだからだ、と述べている。⁽⁶⁴⁾抜き差しならぬ對立關係下におけるこの切迫した危機意識が彼らを蜂起決行に踏み切らせた。楊悅春は草白營子の王增や李彬・丁義和・李廣・聶朱・聶珩・王福ら各教堂の首領と密議して「先に發して人を制するに如かず」として、『掃胡滅清、取得帝位（モンゴルを一掃して清朝を滅ぼし、帝位を取る）』⁽⁶⁵⁾を旗印に、最つ先にモンゴル人を殺して積憤を晴らさんことを決定した。⁽⁶⁶⁾このモンゴル人殺害を掲げたため、各頭目が動員をかけると入教の人はもとより、「附近の民人もみな願つて隨き從い、」⁽⁶⁷⁾これにかりて多年の積忿をはらさんとしたという。十月九日、ひそかに楊家灣子に集まつてきた一、二千人の群衆を、青・黃・赤・白・黒の五旗に分ち、『替天行道、掃胡滅清（天に替りて道を行ひ、掃胡滅清）』の旗を掲げて進發し、十數キロ離れた貝子府に對して攻撃を開始した。府人は預備されていた武器で激しく抵抗した。夜に入つて、金丹道側の火藥車に彈が命中し轟音とともに爆發して傍の人を空中へ吹き飛ばした。これを觀た蒙古兵は、金丹道が法術を施して雲を駕せ、空から府内に來て人を殺すのだと思ひ、驚き惶

ておびえ、銃を棄てて逃走し始めた。金丹道徒は府内に攻め入った。だが、この間に貝子と色二爺・喇嘛四爺は脱出し逃亡しており、蜂起集團は最大の復讐対象を取り逃した。府中の男女及び付近のモンゴル人數百戸は盡く殺害され、貝子の祖先の墳墓は暴かれたたき毀された。恨みと憎しみの發露であつた。翌十一日、近くの曲里營からモンゴル兵百餘が出動して來たが、蜂起軍によつて打ち破られた。敖漢貝子府を占據した蜂起軍はここを「開國府」とし、楊悅春を「開國府總大教師」とした。このとき「敖漢貝子府並びに蒙古人に復讐せん」、「百姓を害せず」等を内容とする告示を出して撫民に務めるとともに、武器、火藥、旗幟、馬匹を調達しつゝ動員部隊の編成を行つた。⁽⁶⁸⁾これはやがて到來する蒙古軍・清朝軍との戦闘に備えるものであると同時に、「開國府」から各部隊を出動させて、朝陽・平泉・建昌・赤峰の四州縣を占領する、という戰略方針に沿つたものであつた。この頃、蜂起集團の一部は四家子地方に進出して來て縣丞衙門を包圍し武器と馬を掠奪している。

十月十二日、李國珍は敖吉地方で張雙、周寬、薛殿寬ら五百餘名とともに蜂起した。この日、李國珍は王増に手紙を出してその蹶起の具體行動を指示している。王増のところには、義州の正黃旗關永佐領の下人で、光緒十七年三月に胞叔の郭柏令とともに隣屯の石體坤を師として武聖門教を習い、該旗による追及を逃がれてきた「唱書」(講釋師)の郭廣海がいた。⁽⁶⁹⁾民國『義縣志』中卷は「光緒十六年、教匪郭百齡、陳明、楊明、等叛す、盛京豐統、匪を勦して義州に駐す、潰兵境に入る。」と記しているが、郭百齡は郭柏令と同一人物であろう。郭廣海は蜂起謀議時に「平青(清)王」の稱號が與えられていたが、王増はこれらの教徒を率いて、朝陽縣木城子の蘇萬深の家に行き、他集團と「會齊」し、武器を取つて沿途で住民を脅從させ、さらに武器を奪いながら朝陽縣城に向つて進んだ。

十月十二日五更——正しくは十三日午前四時頃、夜間早朝——、在裏教徒と「馬賊」四、五百人が朝陽縣城に突入した。この縣城攻撃は二部隊以上で敢行されたい。西北から縣街へ正面切つて攻撃を仕掛けたのがこの在裏教・「馬賊」の部隊で、金丹道集團——これは李廣・齊灝・李斌・張富・聶珩(もと書吏)・郭海(もと兵)・郭洛九らの頭目が率いた

集團と、王増・郭廣海らの集團が合體したものであるらしい——が城内に潛入して火を放ち、獄を破って囚人を放出し、縣署・税員衙門・七道泉子喇嘛廟を焚いた。⁽⁷⁰⁾この金丹道と在裏教との連繫は共同行動がどのようにして行われるに至ったのかは詳しくはわからない。在裏教徒たちの姿はその後、十月二十日頃に義州境近くで、十字旗を畫いた黃旗を掲げていた道人の率いた集團や、楊明・郭瀾萌・杜把仕らが率いた集團として現われている。⁽⁷¹⁾この集團には女性が加わって活躍したのが特徴的だが、⁽⁷²⁾この楊明が先の『義縣志』のいう楊明であるとすれば、前年の「教匪」が一人は武聖教徒として、一人は在裏教徒として姿を現わしていることになり、相互の浸透を十分推測させる。後者は「天を奉じて暴を伐ち、國を護り民を佑く、在裏教門」の旗を掲げて喇嘛廟に對して攻撃を繰り返した。このスローガンの言う「暴」とは、モンゴル王公貴族や喇嘛寺院のそれであると同時に、「護國、佑民」との關連で見るとき、天主教教會と激しく對立していた在裏教が住民の人身と財産の保全を主張したことから考えても、教會と教民の振舞でもあると解釋すべきであらう。ここには老百姓の素朴な民族主義的な思想と感情が發露している。

朝陽攻撃後、郭廣海らは仲間の李林が恨みを抱いていた喀拉沁王府に行き、二十日、火を放って報復した。⁽⁷⁴⁾

敖漢貝子府占領後、十五日には建昌縣三十家子の天主教教會が金丹道徒たちによって襲撃され、教民數十名が傷害を受けた。彼らは夜を衝いて敖漢貝子地方からやって來たらしく、遷安縣の教徒がカソリック教民と對立していたことに憤激して、建昌、平泉、遷安一帶の「各處の天主堂を焚燒せん」といつて騷擾している。⁽⁷⁵⁾十七日の夜、この集團は平泉州街に突入し、西北の平臺子にあつた天主教教會を焚燒した。燃え上る炎に「數千」の人々の姿が映し出されたという。⁽⁷⁶⁾宣教師たちは先に逃げのびていたが、燒跡からは逃げ遅れたと思われる多數の幼児（孤兒）の屍體が發見された。二十日の夜には、平泉州の西にある轟門子溝の天主教教會が二百數十人の道匪によって打ち毀され、多數の教民が殺された、と報じられた。⁽⁷⁷⁾これらの仇敵鬪争に際して、金丹道徒たちは、「自らは善類であり、百姓を害せず、ただ天主堂と隙あり、恨みを挟みて讐を報す」のだと稱した。この頃「金丹教がさわぎをおこす 五聖門兒は荒々しく 天主教を殺す 大兵がひとた

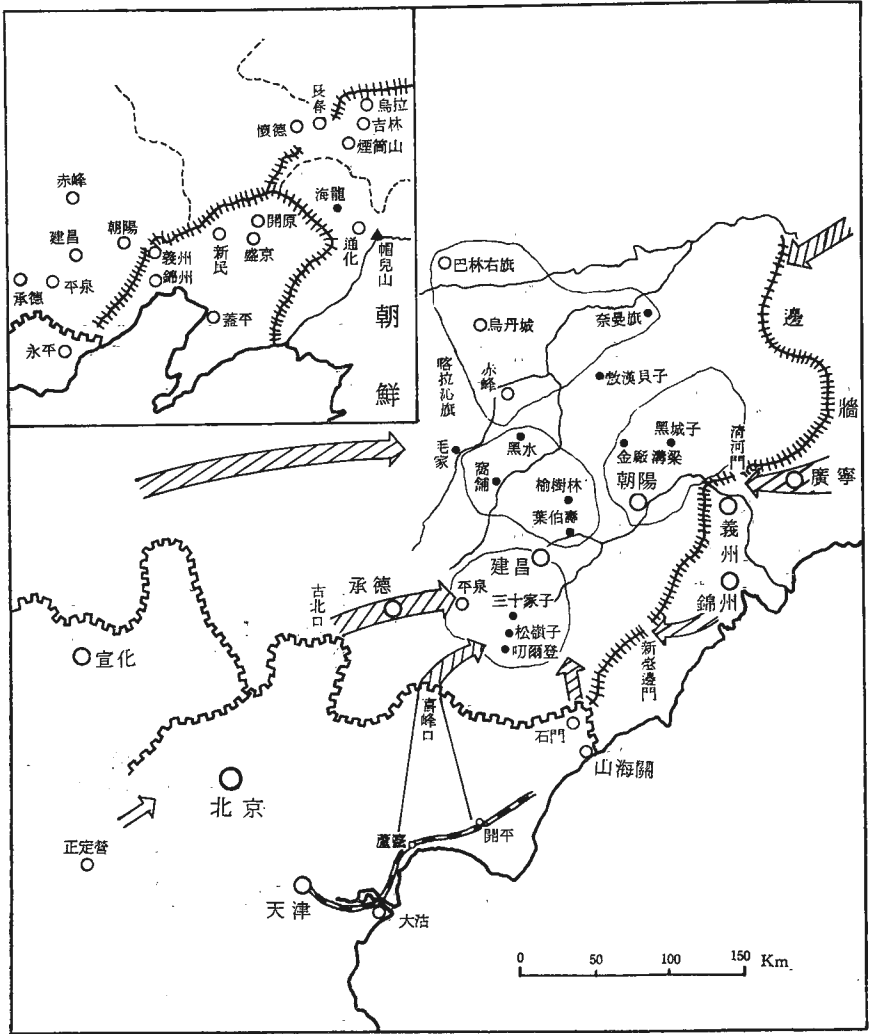
ひ下れば おまえらの頭はちよん切られ、「先に理があり のちに道あり 五聖門兒は荒々しく 天主教を殺す」という歌謡が流行っていたという。⁽⁷⁹⁾直隸省では、天津縣と承德府がキリスト教會の多い地區であつたが、當時承德府下各縣には、灤平縣二箇所、平泉州三箇所、建昌縣五箇所、赤峰縣三箇所、朝陽縣六箇所、圍場廳三箇所のカソリック教會（分教會を含む）⁽⁸⁰⁾が設けられて、フランスの保護下に、イギリス、フランス、オランダ、ベルギー各國の宣教師たちが入つて活動していた。この地區でカソリック布教をめぐるて發生した大きな問題は、教民に對して村民たちが迎神、演劇、賽會、燒香の費用の割當を行ひ負擔させようとして、それを拒否する教民との間で紛糾を起したことであつた（光緒十四年）が、また、教民の大多數は不誠實な行爲を教會によつて保護してもらうために入教したもので、ここでも、教民との訴訟沙汰では住民側が涙を吞まざるを得なかつた。三十家子教會の華人教士林道源は傍若無人で人々の反感を買つていたし、住民たちは教民を紛糾の元兇、村落社會に危險を持ち込むものだとして、激しい敵對感情を抱いていた。この對立の先鋒にいたのが在理教組織で、教民と在理教の二つの宗教組織は激しく憎み合つていたという。⁽⁸¹⁾この一連の仇教鬭争はこのような教民との不和を背景としつつも、更に直接的な對立を契機としている。鬭争の指導者は三十家子の牌長の林玉山であつたが、彼は糧食を搶んだ教民の韓某とそれを庇護した教會に報復しようとしたからだといわれている。教民の韓某は四月に商店から糧食を借りて返さなかつたかして紛争を起したらしい。ところが、韓某はこの紛争を中に立つて調停しようとしていた徐榮・林玉山と口論した揚句に、徐榮を撃ち殺し、林玉山の雜貨店を搶劫するという事件を惹き起した。林玉山はこれに報復しようとしたが、七月ごろ教民側も襲撃に備えて教會で武器を製造するなどして、迂闊に手が出せない對立状態になつた。また平泉州當局がある馬賊を捕えたところ、カソリック教民であつたため、宣教師が壓力をかけて釋放させたので、この點でも人々は不平を訴え、教會に對する敵愾心が増幅されていたからだという。林玉山は報復心に燃えて金丹道組織に接近し、協同して鬭争することを説得したらしく、彼は、楊悅春らが蜂起して救漢貝子府を攻撃したのを知つて、仲間の倭傑らを糾合して三十家子、平泉州、聶門子溝などの教會を燒打ちしたのである。⁽⁸²⁾このように見てくると、林

玉山らにとつては、金丹道組織が帝國主義國家の武力を背景にして政治的特權をもつ教會勢力の横暴さに對抗し得る唯一の信頼すべき力量——民衆の利害を代辯し得る組織であつたことが魅力だつたことが知れる。この關係はモンゴル勢力下の客民漢人と金丹道組織との關係と同質である。金丹道組織はこうしてモンゴル王公貴族や教會勢力の壓迫に對する民衆の自衛的な抵抗組織としてその組織を擴大していったのだ。林玉山の集團は金丹道蜂起にとつてはこの意味で新たな参加者ではあるが、その不可欠の一部分を構成することになる。この地域の社會矛盾に對する抵抗運動、「教堂と蒙古に讐を尋ね、百姓を害せず」⁽⁸³⁾とする運動の仇教鬪争を擔つた唯一の集團となつたからだ。一連の仇教鬪争のうち、この集團は各地でモンゴル人を攻撃し、馬賊や土匪を加えつつ動き回り、一部の千餘は一時三十家子に盤踞した。

十月十六日、盛京將軍裕祿から事變を知らせる電報を受け取つた直隸總督李鴻章は、山海關より邊外の各營を巡つていた直隸提督葉志超に調査鎮壓を飛咨した。葉志超は駐古北口練軍參將韓照琦に兵三百餘を率いさせて先發させると同時に、直隸各軍の出動を李鴻章に要請した。李鴻章は長江流域教案が列強との外交問題に發展しつゝあつた事態に鑑み、外交問題化を避るべく本格的に鎮壓に臨んだ。彼は、淮軍系の駐蘆臺練軍（夏青雲・聶士成）、駐開平通永練軍（楊元昇）、山海關・榆關防衛各營（卞得祥・劉運昌）を石門寨・喜峰口より建昌一帶に派遣することを電報で指令し、その後、西北の宣化練軍（王可陞）の多倫・赤峰への出動を電令、また大沽の直字營洋槍隊を熱河へ投入して鎮壓體制を整えた。奉天省側も、盛字營（豐升阿・耿鳳鳴）奉天練軍（左寶貴）、錦州駐留軍（聶桂林）を投入して包圍體制をつくりあげ、進撃を開始した。⁽⁸⁴⁾

二十四日、三十家子の仇教鬪争集團は古北口練軍韓照琦部隊の攻撃を受けた。その後、集團は建昌縣東南の瓦房店に移動しつゝ、人員を集めて、建昌縣を攻略しようとした。この集團はついで五官營子に至り、「五色大旗」を豎てて野を蔽つた。二十七日、古北口練軍との間で、戦鬪が開始された。參將韓照琦は、「賊首あり、道巾彩衣を著け、劍を執りて法を作し、狀は瘋顛の如し」と、宗教反亂の特徴を報告している。⁽⁸⁵⁾ 建昌縣高爾登（凌源縣叻爾登）の「平西王」佟傑、軍師の裴姓率いる數百の集團などの建昌南部の蜂起集團を掃討した官軍は「金丹道盟簿」・符呪を鹵獲した。⁽⁸⁶⁾ 林玉山は在裏教徒

金丹道蜂起概略圖



だったらしいが、このことから彼とその黨羽は金丹道に連合合流したと考えてはば間違いない。この地區の蜂起集團も次第に官軍に追剿され、三十家子の林玉山、軍師宋先生、佟老耗（佟傑の子）の集團も高爾登一帶に逃げ、三官廟道士吳廣生の黨と合したが、官軍と社、團勇とによって鎮壓され、十一月初めにその動きは終焉を告げた。

十月二十五日頃、奉天境邊外の集團は蒙古人・喇嘛廟宇にあえば、すべてこれを焼殺搶燬し、「相従いて入教すれば則ちこれより蒙古の欺壓をうけず」と喧傳しつつ活動していたが、十月二十八日、集團は邊界附近の朝北營子で奉天官軍の攻撃を受けて敗北し、その後、照樹溝の「十字紅旗」を掲げた李洛道の集團や黑城子の潘岳淋の集團もあいついで撃破された。二十九日には、平泉州判于甫筠率いる郷勇を破って州判を死亡させた楡樹林の黃旗集團が、同じ頃建昌縣葉柏壽で紅旗集團がそれぞれ直隸官軍によって撃敗されている。こうして、數十の小集團に分れてそれぞれ連絡を保ちながら馬賊や饑民を糾合して活動していた數萬の蜂起集團は次第に各個撃破されていきはじめた。⁽⁸⁹⁾十一月四日には毛家窩舖で大砲・擡槍で激しく抵抗した「紅黃大旗」集團も撃ち敗られた。

十一月十四日の下長阜での楊悅春を中心とする集團との戦鬪の様子を葉志超は次のように傳えている。

賊已に麤す、大半は墨を用いて鼻を塗り、……口は咒語を念じ、前を向いて直衝し、槍礮を施放し、子は雨點の如し。十分兇悍なり。⁽⁹⁰⁾

また、黑山地方では「頭目は身は黃袍を穿き、摺訣念咒して指揮して拒敵することし」といわれている。吉林府下の煙筒山での戦鬪⁽⁹²⁾（十一月十九日）についても、

賊は小黃旗を以て邪術を施展し、我軍の槍多く炸壞す、賊は内より闖出し槍子は雨の如し、……兵團の傷を受くるも數十人、均しく退意なく、穢物をもって擡槍に裝入して連撃す。賊始めて驚亂し紛紛として逃竄す。⁽⁹³⁾

とか、「日前官兵と援杖せる時、閒紙人紙馬を用いて以て聲勢を助けるも、嗣いで邪術不靈に因りて擒獲されるに致る」という報告がなされている。これらの宗教反亂に特徴的な、超自然力に護持される聖性と穢物に象徴される俗性（超自然⁽⁹⁴⁾

力を破る威力」との對立についてはかつて述べたことがあるので、再論しないことにする。ただ、民衆の世界が理不盡に踏み躪られたとき、「制度的手段」の缺如のため、政治的あるいは經濟的な要求へと合理化しきれない民衆の内なる根源的な抵抗は極めて倫理的なかたちで現われざるを得ないのであり、そのこれらの根源的な倫理的欲求を世界觀的に基礎づけているものが民衆宗教であり、宗教的に激しく世界を二分し、その宗教的聖性を激しく生きたることを通してこれらの倫理的欲求が表出されているのだ、とこれらの現象は解されねばならないだろう。それがいかに疎外態であろうともである。

十月十二日に救吉地方で蜂起して、モンゴル人を襲撃し武器馬匹を奪った李國珍の集團は、十日餘りの間に數千人に膨れあがった。群衆は李國珍を推して、「開國府」北方の戰鬪を擔う「掃北武聖人」となして、奈曼・海林・東翁・牛特各旗一帯を掠しまわり、十一月二日には烏丹城を陥して貝子府を佔踞し、一部を平泉・榆樹林・毛家窩舖での敗北に復讐させるために南下させ、⁽⁹⁶⁾ ついで赤峰縣城周邊一帯に四、五千人を擁して二十餘營を立て「八卦の方向に按つて名目を混立」した。十一月十六日、この集團に對して直隸練軍をはじめとする諸軍の攻撃が開始された。この戰鬪で、かなりの火器類のほか、他部隊と連絡しあつた書信や、逆示、黃蟒袍、『紀效新書』、『冬明歷(曆)』、『萬全通』、神牌が鹵獲されてい⁽⁹⁷⁾る。この戰鬪で李國珍は負傷して捕えられ、烏丹・赤峰一帯の蜂起も鎮壓されるに至つた。

十八日、吉林長春府城外の鬼王廟で不穩な動きをしていた教匪謝添明・楊泳剛ら十名が捕えられた。彼らは朝陽蜂起に加つたが敗北したため、鬼王廟の僧の蘇姓のもとに逃れ、二十八日に長春城に入城して獄を破り多數を脅從させて再び朝陽へ戻る計畫を進めていたのである。また奉天懷德縣にも教徒がおり、江東の教徒を糾合して一齊蜂起し熱河を救援する計畫もあつたとい⁽⁹⁸⁾う。金丹道組織の廣汎な分布を示す動きである。

下長阜の戰鬪を脱れた楊悅春は、部隊を集めて救援を圖つたが果せず、その後金廠溝梁の山洞内に潛んでいるところを發見され、十一月二七日に子や叔姪とともに捕えられた。⁽⁹⁹⁾

こうして朔風吹きすさび粉雪の舞うなかでの幾つかの激戰を経て、萬餘の屍體を野にさらすことになつた反亂も鎮壓さ

れた。

金廠溝梁を活動據點として、朝陽を占據、赤峰を攻撃、黃袍を着て、〈皇帝〉とか〈開國府總教師〉と稱したこと、殘存勢力の吉林・奉天各地での廣範な活動、金匪や「土匪」分子の參入といった諸點からみて、金丹道蜂起は李鳳奎蜂起と極めて似た行動パターンを見せていることがわかるであろう。民族矛盾の激化と教會勢力に對する宗教結社の思想と組織を中核とした鬪争という新たな歴史的 성격が加わっているが、同じ地理的環境と蜂起形態を規定する諸要因に歴史的繼續性が存在したことがその大きな理由ではなからうか。

鎮壓に當つた葉志超は、直隸總督李鴻章が朝陽の警報を聞くやただちに各軍に電飭して備えさせ、「電報は則ち消息靈通し、鐵路は則ち轉運迅速」で、「口外を相距てること千餘里、山路崎嶇なるも、……數日内に先後して趕到し」奮勇したため、短期間に鎮壓できたのだ、と總括している。即ち洋務運動の成果（電報・鐵道）が効果をあらわしたのである。これを民衆運動の側からみたとき、これらは自らの鬪争にとって巨大な威力をもつた障害となるものであり、義和團運動における鐵道破壊・電線破壊の鬪争もこうした民衆鬪争の經驗を踏まえた點もあると考えるべきではなからうか。

反亂後、熱河統治の改善が提議され、蒙地佃戶からの田租徴收は、内地で王公莊田の田租を州縣が代徴する例にならつて州縣が徴收するようにされた（『光緒朝東華錄』三一〇一頁）。

五 反亂のあと

反亂は鎮壓されたが、彼らの活動が終りを告げた譯ではない。その後も金丹道蜂起に關係した事件が摘發されている。光緒十八年、奉天省蓋平縣當局は、不穩な動きを示していた石力坤を中心とする宗教結社を武力で彈壓した。⁽¹⁰¹⁾

奉天省新民廳三臺子人の沈國泳は、同治年間に外來の道士曹義路から武聖教金鐘罩を習い、「入教して術を學べば能く

刀兵の劫敷を避け、槍炮も傷つく能わず」と喧傳していたが、彼から金鐘罩を學んだのが石力坤である。石力坤は、以前から金丹道の楊悅春や齊保山・潘岳林らと交遊關係にあり、楊悅春らは蜂起を決行する以前に、沈國泳に蜂起について連絡をとって共謀していた。金丹道蜂起に際して沈國泳は、弟の沈國順・石力坤らを朝陽東北の黑城子に赴かせて蜂起に加わり官兵と鬪ったが敗走し、全家を奉天省開原縣八棵樹屯北王家堡に移して名前を變えて潛伏した。石力坤もまた同教の道士魏中洋とともに蓋平縣灰莊屯に潛行して、該地の李庭福らと結んで再び活動を始めた。彼は、李庭福の孫の李中央は青龍の附體である、と捏稱してこれを推戴して主とし、石力坤は李中央を義子と認めて、自らは「蓋世法王」と稱した。石力坤はまた廣寧(現、北鎮)縣民家屯地方でも金鐘罩を傳え、木印・符咒・幡布・槍刀を私造して黨與を集め、蓋平・廣寧一帯で活動するようになった。⁽¹⁰⁾この彼らの動きが官によって摘發をうけ鎮定されることになったのである。この石力坤とは、前述した義州の郭柏令・郭廣海の師傅であった石體坤と同一人物ではなからうか?二人を同一人物と認定するにはなお論證に不十分さが残るが、その可能性はかなり高いと思われる。

東三省に擴大した武聖教はその後も活動を止めない。日清戰爭最中の光緒二十(一八九四)年末の十二月、吉林省下に擴大していた武聖教組織による省城攻撃の企てが武力鎮壓されるといふ事件⁽¹⁰³⁾がおきた。

宗師劉明によって張家口から東三省傳教のために派遣された教首孟毓奇は、沿途で百六十四人の「教首」(大弟子)を獲得し、かれらに三百人から五百人の信徒組織(これを「盤」といった)を領させ、多くの教徒を配下にもつ頭目には「總兵」や「元帥」の稱號を與え、「天・地・雲三種の盤圖」を證據とした。信徒は「山海關内外もって張家口にいたるまで有らざる處なく」その數は「數萬の衆きに至る」といわれている。その後吉林府下に至った孟毓奇は讖言を用いて朱承修の運命占いをやって彼を「主」に仕立てあげ、頭目の張九令・岳詳らと「期を約して逆を謀る」ようになった。吉林府下で困窮生活を送っていた李添成は、光緒十八年に如意門教を習っていたが、二十年八月に孟毓奇が朱承修の家で教を勸めているのを聞いて、孟毓奇を拜して師とし、法術を授けられた。それには「天盤・地盤・雲盤」能く槍炮を避く、の呪語」が

あつた。李添成は十二月初めに、十二月十五日に蜂起を決行して吉林省城を奪う、まず官街に集結せよ、との孟毓奇からの連絡を受け、配下の七十餘名を率つて出發した。初八日、途中で彼らは仲違いしていた于會海の家を焼打ちし、また食料等入手するためであつたらうが、白旗屯街で焚殺劫掠をはたらいたために法特哈門の官軍の追撃を受けた。九日に官街で元帥張九令らの三百餘の隊と合したが、追尾してきた官軍の攻撃を受けて瓦解敗北した。この十二日の戦闘で、大量の武器のほかに、私造した木印・黄令旗・“坎”號の褂四十件餘が鹵獲されている。張九令のうえには「關内外の總教首」で蜂起の「軍師」となった孟毓奇、「僞主」朱承修がいることが供述され、他の「僞帥」「僞將」らとともに逮捕處刑されたのである。この事件は日清戦争のために吉林兵の大半が奉天省内へ動員されている間隙をぬつた蜂起計畫の流産であつた。

義和團運動期、朝陽縣では義和團大衆と金丹道・在理教徒たちが、熱河一帯の總營となつていた松樹嘴子教會を襲つたが、その際、かれらは武器を錫子溝聯莊會から借りた。十一月に、ロシア軍が進駐してくると、宣教師は軍を導いてこの聯莊會の村々を義和團に協力したとして襲い、連合軍と教會による報復が開始された。義和團による教民被害の賠償を要求し掠奪を行うロシア軍・教會勢力に對抗して、聯莊會各村は鄧萊峰を總會首とする「拒洋社會」を結成し、教民洋人と激しく對立し、ロシア軍・清軍・教會武力と戦闘を交えるまでになつた。辛丑條約締結後、朝陽に赴いた直隸提督馬玉昆は兩者の調停を行つたが、教會側はこれを受け入れず、北京のフランス公使を通じて清朝政府に拒洋社會の鎮壓を迫つた。清朝政府は馬玉昆に武衛軍騎馬・歩兵部隊二五營をもつて武力鎮壓することを命じた。一九〇一年十一月、壓倒的な武力の前に鄧萊峰らの拒洋社會・聯莊會は撃滅された。⁽¹⁰⁶⁾

一九〇一年冬、奉天省海龍・通化一帯で活躍していた王和達・董老道らの義和團が、鴨綠江河畔の帽兒山の楊老太太を首領とする六合拳組織に合流した。楊老太太はかつて一八九一年の金丹道蜂起に参加したことがあり、敗北後に彼女は各地を轉々とし帽兒山で祕密結社の六合拳を組織していた、⁽¹⁰⁷⁾といわれる。法術を傳習し、拳棒を教練し武裝した三千餘りの

組織は辮髪を割落して紅巾で束ね、義和拳の如く装った。六合拳組織は海龍城を襲撃したり、通化附近で清朝巡捕隊や團練と戦闘を交え、抗露勢力の一つとなったが、關東司令官アレクセイエフが出勤させたロシア軍、忠義軍から官軍に身を寄せた依凌阿・劉寶書部隊、奉天の騎馬歩兵部隊の攻撃を受けて敗れ、王和達は捕えられて處刑された⁽¹⁰⁸⁾。しかしその後も「各種の歐人を仇視する私教」、「依然これあるのみならず、かつ日に一日と甚だしい」⁽¹⁰⁹⁾「なお在禮會、混元門、八卦門と六合拳等の名目あり、情迹詭秘、朝夕に地方を更易し、甚だしくは衆多の人を聚めて私かに會を做すの情事あり」といわれるように、宗教結社の活動は潛行していった。光緒二十七年に、「風聞するに熱河黑城子地方にいま匪徒の六合拳を演習する情事あり⁽¹¹⁰⁾」と記され、また東清鐵道駐在のロシア人は、鐵嶺縣城南の關帝廟内で子供がひそかに「六合拳」を演習していると報告した⁽¹¹¹⁾。一九〇二年から〇三年にかけて瀋陽・本溪の小事・營口・鐵嶺・柳樹河子・夾皮溝などで義和團あるいは六合拳の法師やメンバーが捕えられている⁽¹¹²⁾。

光緒三十年、奉天省開原縣・鐵嶺縣交界で〈混元門教〉(混元門學好)が發覺摘發された。開原縣はかつて沈國沐らが逃れた所であるが、八月に混元門に入って六合拳を行っていた八名が捕えられ、そのときに、『呈奏天廷表』、抄寫された符呪・道書、『修真寶傳』、『八卦圖』、道帽、『計道經』、『師寶經』、『師寶』の印章、『祈福達天』字の印板、觀音像、道袍、『金剛般若經』などが押收されている。

彼らは、李大法師(守一)を中心に、高七標子、王智剛、高萬知、崔子心を承辦人として、教徒から錢を集めて山地を買い、家屋を建てて「練拳の壇場、傳道の用と作」そうと考えていた。練拳と傳道とは一對のものと考えられているのである。搜獲された邪書の中には、「神拳は天人勝會の用に備う、異種の孽氣、彌天の罪過」などの語があったというから、彼らが演練する六合拳はまさに天人勝會の用に備うる「神拳」であると考えていたことがわかる。事實、「混元門人らは房を蓋妥し、急いで神拳を操練し、法師の傳示を聽いた」、「練拳のときには、燒香・上供⁽¹¹³⁾・念呪し得てはじめて打拳し、槍刀を避阻することができ、練拳功夫すること一百日で成る」と供述されているのである。

このような民衆の活動はやがて東北地方における紅槍會や大刀會の活動に繋ぐことになるが、それらが「迷信」性や「落後」性を多分に保有しつつも、農村自衛力、そして帝國主義侵略に對する民族的抵抗力となったことは周知の事實に屬する⁽¹¹⁾。それは、紅槍會や大刀會がやはり何らかの民衆の眞實を持っていたからにはかならないからであり、その意味で、金丹道蜂起は東北地方における民衆による民族的抵抗の先驅を爲すものであったともいえよう。

註

- (1) 矢澤利彦「長江流域教案の一考察」、同「長江流域教案の研究」(近代中國研究委編『近代中國』第一輯、第四輯、一五八、一九六〇、東大出版會)、里井彦七郎『近代中國における民衆運動とその思想』第二章「一九世紀中國の仇教運動」、(東大出版會 一九七二)、王文杰『中國近世史的教案』(福建協和大 民國三十六年)などの研究がある。
- (2) この事件を扱った論著に、吉林師範大歴史系等編『近代東北人民革命運動史』第二章、吉林人民出版社、一九六〇、Richard Shek "The Revolt of the Zaili, Jindan Secs in Rehe (Jehol), 1891" *"Modern China"* vol 6, 1980. がある。本稿はこれらに大きな寄與をうけている。
- (3) 『承德府志』卷二六藩衛。
- (4) 『承德府志』卷首一一一五詔諭。
- (5) 『承德府志』卷首二一七詔諭。
- (6) 『朝陽縣志』卷二五風土。
- (7) 『朝陽縣志』卷三三紀事。
- (8) 乾隆五十七年に出口禁令が一度解除されると、喀拉沁・敖漢などへの漢人移住がおき、『承德府志』によると、出口漢民は五五萬七千餘(乾隆四九年)から八八萬四千餘(道光七年)に増加、一九世紀初めに内蒙古東南部では「開墾地畝較多、牧場較少」の局面が現われた(沈斌華『内蒙古經濟發展史札記』一一二頁、内蒙古人民出版社 一九八二)。
- (9) 『文宗實錄』卷二二四—三四・三五。
- (10) 宓汝成「清政府籌措鎮壓太平天國的軍費及后果」(『太平天國學刊』一輯三七〇頁)、『文宗實錄』卷二二九—二一・一三參照。
- (11) 『穆宗實錄』卷六〇—一四・一五。
- (12) 『朝陽縣志』卷三三。清朝は大錢鑄造と軍器製造の急需に應えるべくこの地區で銅鑛山の採掘を命じたが、官僚・商人の搾取のために鑛山労働者が屢々騒ぎを起した(『近代東北人民革命運動史』二四・二五頁)。民國『呼蘭縣志』卷三參照。
- (13) 劉毅生「太平天國期蒙古地區各民族人民的反清起義」、『歷史教學』一九八一、六。
- (14) 民國『義縣志』中卷。『近代東北人民革命運動史』二四頁は「抗糧」起義としている。

- (15) 『朝陽縣志』卷三三。
 (16) 『文宗實錄』卷三四三—九・一〇。『朝陽縣志』卷三三。
 (17) 『文宗實錄』卷三四四—七・八。
 (18) 『朝陽縣志』卷三三。
 (19) 『穆宗實錄』卷一五—三四・五一、卷一七一—一九・二〇、
 卷二八—一五七。
 (20) 『穆宗實錄』卷八二—二六・二七、卷八三—二五・二六、
 卷八六—四二・四三。
 (21) 『穆宗實錄』卷一六〇—三一・三二、卷一六一—一五・六、
 卷一七二—二三・二四。
 (22) 王仲元は同治一四年に朝陽を攻撃している(『朝陽縣志』
 卷二四)。以上の記述は朝陽周邊を中心にしたもので、東北地
 方全體については『近代東北人民革命運動史』二二—三七頁を
 参照されたい。
 (23) 『德宗實錄』卷一八五—一六、卷一九〇—二・三・四。
 (24) 『李文忠公全集』奏稿五十「練軍勦匪獲勝摺」。
 (25) 『劉武愼公遺書』卷七奏稿六「游民出口請飭將軍都統稽查
 片」(同治三年四月二五日)は「長城坍塌處所不少、單騎獨行、
 易於偷越、巡察尤難。比年山東曹州等府水患爲災、多有游民出
 口謀生。直隸滄、青各處亦有同往者。……漸因飢寒流爲盜賊。
 ……馬賊之來多由乎此」とのべている。長城内外の馬賊活動に
 ついては、卷八奏稿七「兇勦馬賊摺」等の各摺を参照のこと。
 (26) 『光緒朝東華錄』(中華書局)二九二三頁、光緒十七年六月。
 (27) 『李文忠公全集』奏稿五十「查覆口外勦賊情形摺」。
 (28) 徐潤『徐愚齋自敘年譜』六三葉。收租局は種種の名目で附

加税をとりたてた。

- (29) 李文治編『中國近代農業史資料』第一輯六五頁。
 (30) 『朝陽縣志』卷三三—一九。
 (31) 『硃批奏摺・農民運動』卷六〇〇—三三號、光緒十八年正
 月二十一日直隸總督李鴻章奏、(以下『硃批』と略す、陸景琪・
 程嘯篇『義和團源流史料』中國人民大學一九八〇—以下『源流
 史料』と略す—二四頁)。理藩院事務都統恩承なども「蒙古
 類客民耕種收租資生、亦實有相依爲命之勢。風聞平時虐待客
 民、故此大匪徒得以藉口」といわざるを得なかった(『宮中檔
 光緒朝奏摺』六輯 七七二頁、以下『宮中檔』と略す)。また
 敖漢扎薩克「盜買該處常平倉穀、……民間所存糧米、亦恃勢強
 購、小民受累」(『光緒朝東華錄』二九六七頁)という。
 (32) 『宮中檔』六七九頁、恩承等奏。
 (33) 『宮中檔』七五八頁、定安・裕祿奏。
 (34) 『朝陽縣志』卷三三。
 (35) 『近代東北人民革命運動史』六五頁。
 (36) 『德宗實錄』卷三〇—一六。
 (37) 『硃批』、光緒十八年正月二十一日直隸總督李鴻章奏。
 (38) 『宮中檔』七三六頁、定安・裕祿奏。
 (39) 『徐愚齋自敘年譜』六二葉。五戒(殺・盜・淫・妄・酒)
 を守らせ、佛陀・菩薩・玉皇・老子を拜し、靈媒もやったとい
 う(Paul Serruys, "Folklore Contributions in Sino-Mongolia"
Folklore Studies, vol. VI, 1947, p. 24)。
 (40) 『宮中檔』八五七頁、葉志超奏。
 (41) 『宮中檔』六五六頁、德福奏。

- (42) 『近代東北人民革命運動史』六〇頁。
- (43) 『徐愚齋自敘年譜』六二葉。教内幹部は李洛道、齊洛道、張洛師、姚洛師、黃洛師、刁洛道など、洛や道・師の字を用いた號をつけた。
- 朝陽の北の丘陵地を根據地とするギャングの頭目郭海は千人の部下を持ち、蜂起に際して朝陽を占領し「平清王」を號したと云ふ (Timothy Richard, "The Anti-Foreign Riot in China in 1891", North China Herald Office, 1892 pp. 67, 68.)。
- (44) 吉岡義豊『現代中國の諸宗教—民衆宗教の系譜—』(佼成出版昭和四九年) 六〇、二四二頁。
- (45) 程敏「民間宗教與義和團揭帖」(『歴史研究』一九八三年二期)、拙稿「清代白蓮教の史的展開」(『續中國民衆反亂の世界』汲古書院 一九八三)
- (46) 註(37)に同じ。
- (47) 『宮中檔』八五七頁、葉志超奏。
- (48) 『宮中檔』八四一頁、長順・富爾丹奏。
- (49) 『宮中檔』八輯八一五頁、恩澤等奏。
- (50) 《硃批》光緒十八年十二月初三日盛京將軍裕祿奏(『源流史料』一二六頁)。
- (51) 註(49)に同じ。嘉慶十八年の天理教反亂では『三佛應劫書』にもとづいて、林清—天盤、李文成—人盤、馮克善—地盤、牛亮臣—仙盤とされた(『平定教匪紀略』卷二九)。徐珂『清稗類鈔』宗教類「黃天教」にもみられる。
- (52) 拙稿「清代白蓮教の史的展開」、一六六頁参照。金丹道は「學好的」"ni-mi chao" (密密教)ともいったらしい (Timothy Richard, *op. cit.* p. 79)。密密教と青蓮教(金丹道)はいずれも江西省を活動舞臺にしており何らかの繋りがあるのかも知れないが、現在のところ不明。密密教については、野口鐵郎「明末清初における千年王國論的宗教運動」(『千年王國論的民衆運動の研究』東大出版會 一九八二)、同治「瑞金縣志」卷一六を参照のこと。金丹教のちに先天教と名を變えたと云ふ (Paul Serrus, *op. cit.* p. 26.)。
- (53) 『宮中檔』八二一頁、葉志超奏、七三五頁、定安・裕祿奏。
- (54) 興亞宗教協會編『華北宗教年鑑』民國三十年、五〇八頁、『蓋平縣志』卷十一、宗教志。
- (55) 徐珂『清稗類鈔』宗教類、在裏教。
- (56) 末光高義『支那の祕密結社と慈善結社』滿洲評論社 昭和十四年 二六二頁。
- (57) 西順藏譯「仁と學」(『原典中國近代思想史』第二册 岩波書店 三七六頁)。
- (58) 『奉天通志』卷九九、民國「輯安縣志」卷三。
- (59) 註(57)に同じ。
- (60) 『李文忠公全集』奏稿四七「在理教請兇查辦摺」。
- (61) 《硃批》、光緒二十三年三月十三日延茂奏。(第一歴史檔案館藏)。
- 「緣郭廣海籍隸奉天義州、係正黃旗關水佐領下人、一向唱書度日、在監病故之郭柏令係其胞叔。光緒十七年三月間、郭廣海聞鄭屯石體坤素習武聖門教、遂與郭柏令拜認石體坤爲師傅、傳與呪語。後被本旗訪拏、逃赴熱河草白營子、投入教首王增股内、即封郭廣海爲平青王、商議起事謀反、陸續購備洋

歌器械、置造旗幟。至十月十二日、王增因接僞主李國珍來信、即帶領郭廣海等赴朝陽縣木頭城子蘇萬深家會齊、各持槍械奔往朝陽縣、沿途裹脅居民、搶掠槍礮、共有千餘人。至十三日、闖進朝陽縣街、與護衛營勇接仗、并焚燒衙署、搜搶財物。後因同夥李林等聲稱與蒙古喀拉沁王有仇、邀允郭廣海等前往報復。二十日、行喀拉沁王府、放火殺人、不計其數。二十七日又在五官營子與古北口官兵接仗、因拒敵不遇、越山逃逸。十一月初一日隨同李國珍攻克烏丹城、十六日在該處林溝又與官兵接仗、因王增等被擊身死、郭廣海等……逃至吉林雙城堡……」

(62) 《殊批》光緒十八年十二月初三日盛京將軍裕祿奏(註(50))。

(63) 『宮中檔』八五七頁、葉志超奏。

(64) 『徐愚齋自敘年譜』六二葉。

(65) 「平清滅胡」を掲げたともいう(『朝陽縣志』卷二四)。

(66) 註(37)に同じ。

(67) 『朝陽縣志』卷三三。蜂起の社會經濟史的背景として、

前年直隸で洪水が起き飢民が発生していたこと(『宮中檔』六二三頁、德福奏。『清代海河澗河洪澇檔案史料』中華書局 一九八一—五三四—五五四頁參照)、「本年年景歉收、良泛之田僅收十二之三、薄田僅收十之二二」(『朝陽縣志』卷三三)、[、]、該地方の貧窮生活(「見無衣苦民、其小孩則上身單衣、情尤可憫」)、「目觀男女老少、有無上衣者無下衣者、共在土坑向火、且無食進腹數天」、「看貝子以北之村子更加窮苦、不禁暗暗生憐」、(『徐愚齋自敘年譜』六十六・六二葉)がある。

(68) 五大旗編成とともに、大王・王・侯・九門提督・兵馬大元帥・元帥・先行・軍師・領兵・先鋒・總領などの職務編成を行ない、東路土默特旗一帶(王增・王福)、西路平泉州喀拉沁旗(李青山)、北路赤峰縣(李國珍)、そして楊悅春部隊、大きく分ければ四隊、林玉山らを加えると五隊に分かれたと考えられる(註(37)の楊悅春供述を參照)。

(69) 註(61)に同じ。

(70) ラマはその地位を利用して官府にくい込み訴訟に干預したので民衆はかれらを恐れていたという(『奉天通志』卷九九)。

(71) この頃、同地域に「黃羊教」徒千餘の動きがみられ、「術は能く刀槍を避く」といった(『宮中檔』六八六頁、崇善奏)。これは内蒙古の胡萌の「黃羊教」であるという(陸景琪「朱紅燈領導的義和拳鬪爭中的幾個問題」、『義和團運動史研究論叢』山東大學 一九八二、七三頁)、註(112)參照。

(72) 『宮中檔』六八八頁、定安・裕祿奏、「道匪中尙有女兵打仗、竟有女賊亦是奇聞」(『徐愚齋自敘年譜』六五葉)。

(73) 『宮中檔』六五一・六八六頁、崇善奏。

(74) 註(61)に同じ。『宮中檔』六四七頁、德福奏片。

(75) 『宮中檔』六二八頁、德福奏。

(76) 『宮中檔』六四七頁、德福奏。

(77) 『宮中檔』六五五、六五六頁、德福奏。

(78) 『宮中檔』六五五、六五六頁、德福奏。

(79) Paul Seruys, *op. cit.* p. 25

(80) 一八三八年にグレゴリウス十六世がパリ宣教會に滿洲教區を委託、ヴェローラ司教が一八四一年に雍正禁教以後も残っていたカソリック村、朝陽の松樹嘴村に入って以來、ここを中心

に活動が續けられた〔滿洲宗教誌〕滿鐵社員會 昭和一五年、二二二頁。『教務教案檔』第五輯、三八二—三八五頁。

(81) 『教務教案檔』第五輯三三三頁。"Timothy Richard, *op. cit.*, pp. 69, 76.

(82) 『光緒朝東華錄』三〇六五頁、註(37)史料。林道源は殺害されて屍體を裂かれ、首を樹に懸けられた〔薛福成〕『出使日記續刻』卷三—四七)。“The Northern Rebellion”, *Chinese Recorder*, vol. 23 (1892), p. 135. は蜂起は平泉と朝陽・建昌の二ヶ所からなり、仇教鬪争の契機は糧食の分配をめぐるに在り、教徒が殺害されたが、事件がもみ消されたことによる、と云ふ。“Timothy Richard, *op. cit.*, p. 79 参照。

(83) 『宮中檔』六八二頁、德福奏。

(84) 官軍出動に際して宣教師が該地地圖を與え教民保護を圖た〔樊國樑〕『燕京開教略』下編 七九頁)。

(85) 『宮中檔』六九二頁、葉志超奏。「此股賊匪、自起事以來、妄稱妖術」といふ。

(86) 『宮中檔』七三四頁、德福奏。

(87) 『宮中檔』七三七頁、定安・裕祿奏。

(88) 『宮中檔』六九八頁、葉志超奏。このとき「偽教神銅像」が捕獲された。林玉山らの集團とも思われる。

(89) 『宮中檔』七六二頁、李鴻章奏、八三〇頁、定安・裕祿奏。蜂起集團は各地の「教堂」に立籠ったが撃破されていた。

(90) 『宮中檔』七九二頁、葉志超奏。

(91) 『宮中檔』八二四頁、葉志超奏。

(92) 十一月初めに朝陽から連絡が来て、教徒の孫剛らが朝陽に

呼應して蜂起した(《硃批》光緒十七年十二月十三日長順・富爾丹奏)。「賊以小黃旗施展邪術 我軍槍多炸裂、賊由內闖出、槍子如雨、鄉團頭目……練目……陣亡 兵團受傷數十人、均無退意、復以穢物裝入擡槍連擊、賊始驚亂紛紛逃竄、……賊中手執黃旗者即偽軍師孫剛、已於敗逃時、自刎身死。……該匪等與孫剛素習邪教、早蓄異謀、自十一月初有朝陽教匪馬連起潛至該處勾串、孫剛並該匪等起事以爲朝陽接應、孫剛稱爲軍師、趙泳汛名爲謀主、其所備槍斃刀矛馬匹均係平日豫儲及掠取各舖家防夜之物、日前與官兵接仗時、閒用紙人紙馬以助聲勢、嗣因邪術不靈致被擒獲」。

(93) (94) 註(92)に同じ。

(95) 拙稿「乾隆三十九年王倫清水教叛亂小論」(『一橋論叢』八一—一一)。

(96) 『宮中檔』八二五頁、葉志超奏。

(97) 『宮中檔』八六〇頁、葉志超奏。

(98) 『宮中檔』八四一頁、長順・富爾丹奏。

(99) 『宮中檔』八五七頁、葉志超奏。

(100) 『宮中檔』八六三頁、葉志超奏。

(101) 《硃批》光緒十八年十二月初三日盛京將軍裕祿奏(註50)。

(102) 『蓋平縣志』卷三は、光緒八年頃から《混元門》があり、教徒が數千人いたこと、光緒十六年に灰莊屯に白蓮教の傳來があったことを傳えている。

(103) 《硃批》卷六〇三一號 光緒二十年十二月十三日長順・富爾丹片(『源流史料』一一八頁)、『宮中檔』八輯 八一五頁、

恩澤・富爾丹奏、〈硃批〉卷六〇三—三號 光緒二十二年三月二十五日增祺奏（『源流史料』二一九頁、光緒二十三年三月十三日延茂奏（註(61)）。『宮中檔』九輯、七八八頁、恩澤奏。

(104) 同年十一月、黑龍江呼蘭縣で單兆安らが組織した儒門教（如意教）が『太陽經』を使用して消災免禍を唱えていたのが摘發されている（註(103)の増祺奏）。嘉慶年間に發遣された安徽の王氏一族、劉松の子供らが傳えたものであろう（拙稿「清代白蓮教の史的展開」、前稿でこの儒門教と金丹教武聖教とを短絡させたのは誤りであった）。

(105) 廖一中等編『義和團運動史』人民出版 一九八一、四六二頁、『義和團檔案史料』四一—三頁。教會は光緒初年設立（『朝陽縣志』卷八、註(80)参照）。

(106) 『朝陽縣志』卷二三 忠義、卷三三。

(107) 『義和團運動史』四九〇頁。

(108) 『義和團運動史』四七八—四九三頁、黎光等『義和團運動在東北』吉林人民出版社 一九八一、一六九—一七四頁、吉林省社會科學院編『一箇俄國軍官の滿洲札記』齊魯書社 一九八二、三一・四五—五一・七二頁。

(109) 『義和團運動在東北』一七五頁。〈混元門〉は光緒三、四年頃からあるという（『奉天通志』卷九九）。

(110) 『東北義和團檔案史料』八三頁。

(111) 同右書、九四頁。

(112) 『義和團運動在東北』一七五頁。その他にも「吉林有洪、蓮門、卽紅羊教、暗圖學事」（『軍機處錄副奏摺・農民運動』卷二 九四—一五號 光緒二十八年六月八日薩保奏）といわれた。註

(71) 参照。

(113) 『東北義和團檔案史料』二四八—二五八頁。

(114) 末光前掲書、渡邊龍策『馬賊』中央公論社 一九六四、など参照。

〈付記〉

本稿は北京第一歴史檔案館所藏の金丹道蜂起に関する〈硃批奏摺〉を利用して成ったものである。關係諸位に感謝申しあげる。『宮中檔』所收奏文と同じ場合は全て『宮中檔』として註を加え、『義和團源流史料』所引のものはその頁數を註に加え、原檔の場合のみ原文引用を行った。

故西順藏先生の鴻恩に深謝し拙稿を捧げる。

THE FORMATION OF KHUBILAI'S POWER AND THE CHINESE TROOPS 漢軍 UNDER HIS RULE

IKEUCHI Isao

In times of utmost emergency, the foundation as well as the structure of the power of the state organization tend to be exposed. Thus when Arik-buqa in 1261 had attacked Khubilai and invaded China as far as the Kaiping 開平 district of Shangdu 上都, he repelled Arik-buqa and established his defense line along the Great Wall, still confronting his Mongolian rival. In the military governed state then set up by Khubilai, the Mongolian troops were divided into two sections: the left wing was stationed in Xuande 宣德 and Dexing 德興, the right wing in Xingzhou 興州. Khubilai's personal troops 怯薛, the guards under the command of Shi Tianze 史天澤, as well as the Chinese troops stationed in Ezhou 鄂州 under Khubilai's leadership were taken together to form the central unit. As such they came to be positioned in the center area between Xuande, Dexing, and Xingzhou, near the river Chao 潮. Moreover troops under the command of Shi Tianze's family were stationed for the defense of Yanjing 燕京 in the background as well as on the border to confront the Southern Song.

Assuming that the original state organization of the nomad Mongol tribes, i. e., the military form of government, was gradually altered to a stable national form of state organization, the first steps taken by Khubilai establishing his power by stationing troops and especially relying heavily on Chinese military have to be considered very enlightening.

THE INSURRECTION OF JINDANDAO 金丹道 IN JEHOL IN 1891

SATO Kimihiko

The 1891 insurrection of religious societies centering around the ideas

and organization of Jindan dao, which erupted north of the Great Wall, represents one part of the high tide of anti-Christian movement in modern Chinese history, together with the missionary cases of the same year in the Changjiang River valley.

In the course of the Qing dynasty, more and more Chinese had gone to live north of the Great Wall with the Mongols. Most of them became tenant peasants, who were under the control of the Mongol rulers and Lamaistic temples. While this area had already seen plenty of rent resistances and land tax resistances around the time of the Taiping Rebellion, from the beginning of the Guangxu 光緒 era under the increased pressure of Mongol royalty and aristocracy, there developed several new popular religions among the immigrant Chinese. Besides Jindandao there were Wushengjiao 武聖教 (Jinzhongzhao 金鐘罩), — a syncretistic creed mixed of Qinglianjiao 青蓮教 and Baguajiao 八卦教. Spreading rapidly they contained tremendous attraction for lonely and homeless people. Moreover, there was Zailijiao 在理教 which claimed to unify the three teachings, which also grew in influence very fast. Consequently these popular religious societies represented the general welfare of the people of the area, on the other hand, they gradually adopted a hostile attitude towards Mongol rulers and the Church forces who bullied people on the strength of their political privilege.

In 1891, on the 10th of the 10th month (11. November), Jindandao rose in rebellion with the slogan "In place of Heaven, practice the Way 道 : Expel the barbarians, destroy the Qing." Attacking Aohan 敖漢 Beizi official residence, they captured Chaoyang 朝陽 District. The followers of Zailijiao began to destroy Catholic parishes, beginning with Sanshijiazhi 三十家子 Church in Jianchang 建昌 District, under the motto "Worship Heaven, upset the tyrants, protect the state, save the people, Zailijiaomen 在裏教門."

The insurrection was the beginning of the joined fighting of Jindandao, Wushengjiao and Zailijiao. The governor-General of Zhi-li Li Hongzhang 李鴻章 and the Provincial Commander-in Chief Ye Zhizhao 葉志超 used telegraph and railway to order his troops Huaijun 淮軍 to the scene. Nevertheless the fighting lasted for more than a month, when the insurrection was fully under control. This insurrection was an anti-

feudal struggle, and as for North East of China, it can also be evaluated as the initial stages of the national liberation movement that led the Yihetuan Movement, anti-Russian and anti-Japanese struggle.

A FUNDAMENTAL EXAMINATION OF THE “ENTRY ON SEONGSSI 姓氏” OF THE “TREATISE ON GEOGRAPHY” OF THE *SEJONG-SILLOK* 世宗實錄

HAMANAKA Noboru

The “Entry on Seongssi” of the “Treatise of Geography” of the *Sejong-Sillok* is an invaluable source for the history of Korea of the Koryeo 高麗 and early Yi Dynasty 李朝 periods. Up to now, however, the “Entry on Seongssi” has not been studied as such, thus in this article I concentrated on this very text and analyzed it using the two texts underlying it.

The “Entry on Seongssi” is ultimately based on two texts, on the Koryeo period text *Kocheok* 古籍 and on the *Kwan* 關 of the Yi Dynasty. The latter being a report by the inspector of the various provinces assembles all the seongssi in the various administrative units at the time of *Sejong*. The former is a compilation of seongssi in use in the latter half of the 13th and the first half of the 14th centuries, which was made by the same way of *Kwan*.

In the early Koryeo period, villages were one-family-name organized, i. e., people’s *pongwan* 本貫 would generally correspond with their place of residence. Towards the later Koryeo period the people became more mobile and generally there were more people living away from their *pongwan*. Since the “Entry on Seongssi” of the *Sejong-Sillok* is a compilation of seongssi, with their *pongwan* in the various administrative units, it reflects the social changes that took place around the end of the Koryeo and beginning of the Yi Dynasty periods partly. However, it must be properly kept in mind that the “Entry on Seongssi” did not record all the seongssi since the early Koryeo period.